

1985

SHIN MACHI  
新 町 遺 跡

(岩村田遺跡群)

長野県佐久市岩村田新町遺跡発掘調査報告書

昭和60年12月

長野県佐久市教育委員会

## 例 言

- 1 本報告書は、長野県佐久市建設事務所による都市計画街路事業御代田佐久線改良工事に伴い、佐久市教育委員会が調査主体となり実施した岩村田遺跡群新町遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は林幸彦を調査担当者として、昭和60年10月14日～12月21日まで発掘調査・整理・報告書作成を行った。  
発掘調査対象地 佐久市大字岩村田新町843-2、844、847-5、850-1、852-1、  
854-1、857-1、858-6、847-1。
- 3 本書の挿図は佐々木・小平・糊沢・大井・羽毛田が作成し、写真は佐々木・羽毛田が撮影した。原稿の執筆は第II章の1を白倉が、他を林が担当した。なお、遺物の写真現象等で佐久埋蔵文化財センターの畠山俊彦氏、報告書作成で同センターの三石宗一氏・高橋純子氏の御協力を得た。
- 4 本調査に関する資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 本文目次

### 例 言

#### I 発掘調査の経緯

- 1 調査に至る動機…………… 1
- 2 調査に関する組織…………… 2
- 3 調査日誌…………… 2

#### II 遺跡の環境

- 1 新町遺跡付近の自然環境（地形地質）…………… 3
- 2 遺跡の歴史的環境…………… 4

#### III 調査成果

- 1 D 1号土坑…………… 7
- 2 D 2号土坑…………… 8
- 3 F 1号掘立柱建物址…………… 8
- 4 F 2号掘立柱建物址…………… 9
- 5 F 3号掘立柱建物址…………… 10
- 6 新町遺跡出土遺物…………… 12

# I 発掘調査の経緯

## 1 調査に至る動機

新町遺跡は、佐久市北部にみられる特異な「田切り」地形が微高地に変化する岩村田市街地を中心とした岩村田遺跡群の北西端に位置している。岩村田遺跡群は、数ヶ所の発掘調査と詳細分布調査によって、弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代にかけての大複合遺跡群であることが知られている。低地を境にして西側に隣接する枇杷坂遺跡群の上直路遺跡では、弥生時代の青銅製釧が15点一括出土して、全国的にもたいへん貴重な調査が行なわれている。

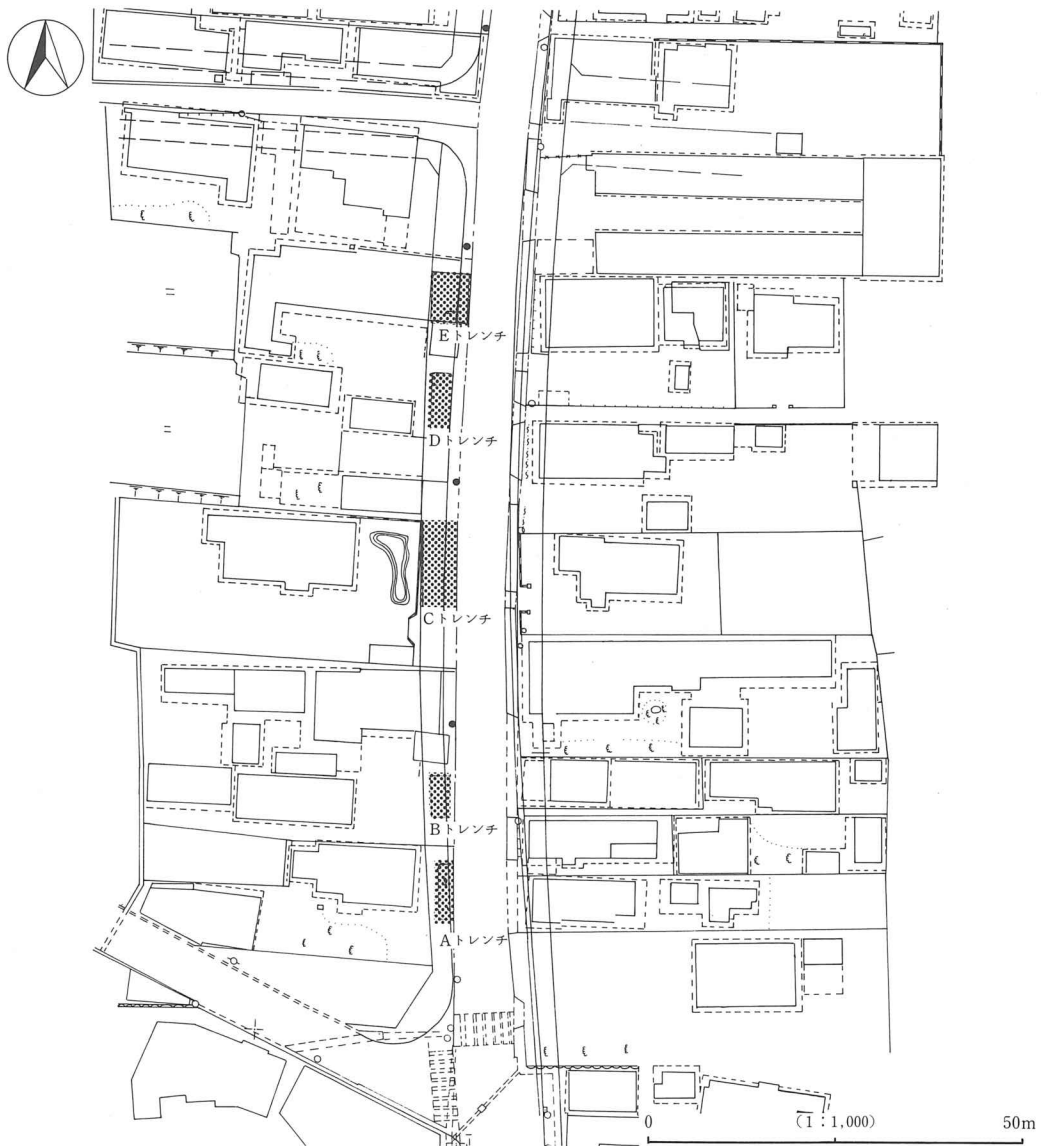
佐久建設事務所により、昭和60年度岩村田地籍都市計画街路事業・御代田佐久線改良工事が実施されることになった。当該地内における埋蔵文化財の保護については、昭和60年5月11日付60佐建第211号で佐久建設事務所より協議があり、昭和60年6月5日付60教文第9-8号により長野県教育委員会文化課から回答があった。その結果、遺跡の破壊はやむをえないものとし、緊急に発掘調査し記録保存することとなった。調査は、佐久建設事務所の委託を受け佐久市教育委員会が実施した。

## 2 調査に関する組織

調査主体者	佐久市教育委員会
教育長	大井 昭二
教育次長	柳沢 昇一
社会教育課長	茂木 多喜男
社会教育係長	関本 功
社会教育係	白石 賢次
	林 幸彦
	高橋 和敬
社会教育指導員	森泉 かよ子

### 調査参加者

調査担当者	林 幸彦
調査主任	佐々木 宗昭
調査員	大井 今朝太、白倉 盛男、森泉かよ子
協力者	界 益子、井出百合子、大井和子、棚沢壮一、小平武典



第1図 新町遺跡地形及び調査区設定図

### 3 調査日誌

10月14日（月）～16日（水）

器材の搬入・整備

10月17日（木）

トレンチ設定、テープ張り

10月18日（金）～22日（火）

A・B・C・D・Eトレンチ表土削平及びプラン確認。

10月23日（水）～25日（金）

F1・2・3号掘立柱建物址、D1・2号土坑の覆土掘り下げと土層断面図及び断面図の作成。

10月26日（土）

全体図作成、写真撮影、器材徹収。

12月16日（月）～21日（土）

図面整理・修正、遺物水洗い・復原、原稿執筆

## Ⅱ 遺跡の環境

### 1 新町遺跡付近の自然環境（地形地質）

千曲川が南北に貫流する流域に発達した佐久平は、北に向かって逆三角形を呈し、東は荒船火山や佐久山地(秩父古生層地帯)に、西は八ヶ岳立科火山帯、北は活火山浅間山に囲われている。

今回発掘調査した新町遺跡は、その佐久平の北端の浅間火山の南斜面末端部分に位置し、標高719m～720m内外を示している。

浅間山は標高2542mの活火山で洪積期に入って活動を開始した最も新しい火山で、最初は黒斑火山として大規模な火山として成生し、火口直径4kmの大火口をもった成層火山で、3000m近い山態を形成していたと考えられている。その後数個の爆烈火口の発達や、ほぼ南北に貫く大断層によって東半分の落み込み、寄生火山の発生に伴って山体の東半分は破壊され、その部分に前掛火山が発生し、さらにその中に現噴火口が小規模に(火口300m内外)になった三重式成層火山である。

浅間山南斜面には北軽井沢から発源する湯川と、寄生火山石尊山(1007m)北の血の池から発する濁川、小諸に流下する蛇掘川とがあるが新町遺跡付近には湯川の影響がほとんどない。濁川周辺と和田南田切は水便に恵まれ水田も古くから開発され、丘陵中央部は多くは畑となっており、最近まで山林地とさえなっていた部分も多かった。

この付近の地層は概観すれば浅間火山の噴出物の軽石、火山弾、火山砂礫、火山灰の堆積層であるが、和田田切りの断面等で見られる層序は次の如くである。

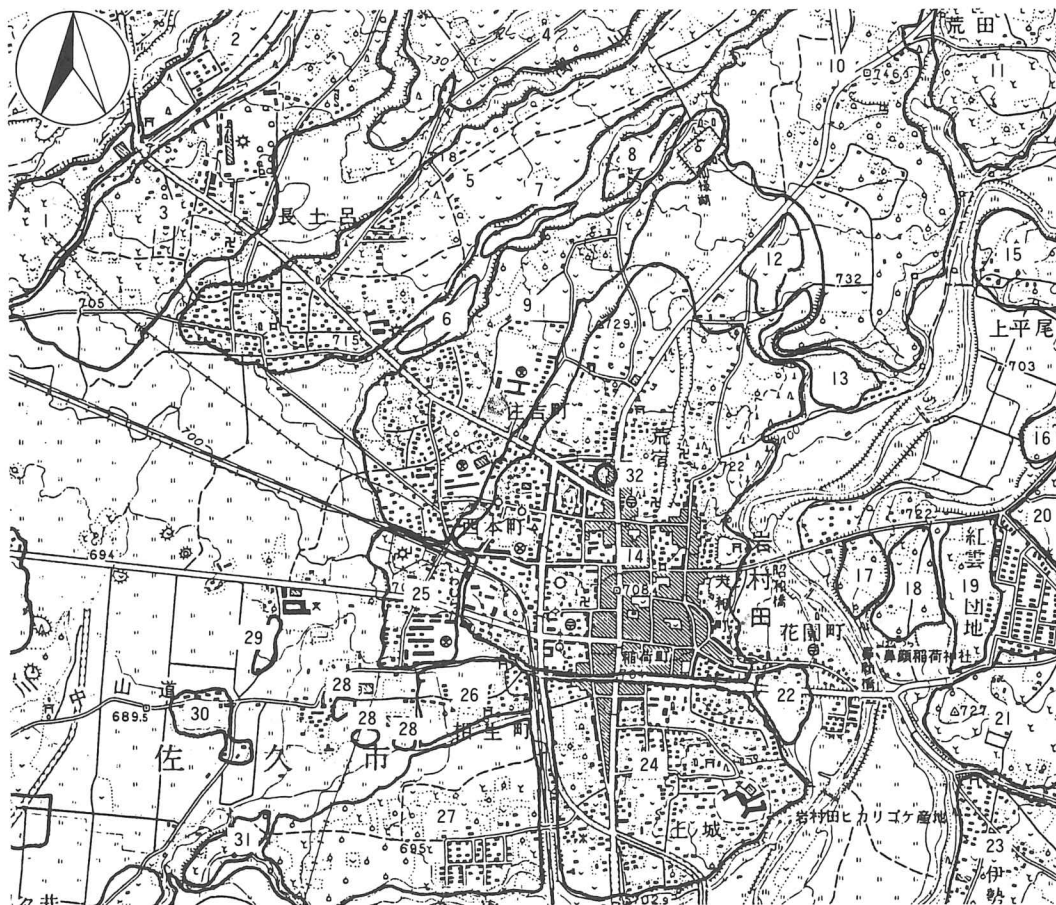
基盤には黒斑火山の水蒸気爆発による塚原泥流が分布している地帯であるが、この10数mの断崖ではそれを確認することができない。おそらく更に深い所には見られる筈である。断崖に見られるものは黒斑火山軽石流の厚い堆積で、軽石を含む火山灰砂の堆積で、一部分水流に運ばれた軽石層の薄層を含む水中堆積層でほぼ水平層をなし10m以上の層厚を示している。最上部は濁川

の汜らん源のあとを示す火山砂を大量に含む火山灰層が40～40cmの厚さで重なりその表面上部を黒土が被っている。

白倉 盛男

## 2 遺跡の歴史的環境

佐久市内の遺跡は、昭和57・58年度の詳細分布調査<sup>(1)</sup>によって553箇所が確認されている。この数は今後未調査地域である山林・山野で新しく発見される可能性が高いため相当な数の増加が予想される。縄文時代は東山や西山の段丘上に濃く、弥生時代～平安時代は千曲川、片見川、湯川流域の平坦地に濃密に分布する。特に市北部の旧浅間町を中心とする地域では、滑津川以北に特有な田切り地形の台地上に進中している。この地域には湯川の他に濁川など数条の河川が西南に向けて流下し、小田井から長士呂近辺の国道141号線までは、急峻な谷がみられるが、小海線及び中山道沿線に至っては、河川との比高は減少し微高地が形成されている。第1表に示したように、これらの台地、微高地上に多くの遺跡が存在する。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25000) (国土地理院発行の地形図より)

表から窺えるように、これらの遺跡は弥生時代～平安時代の時間的重複がひんばんである。ことに弥生時代の遺跡は多く佐久地方にもとより、東信地方あるいは長野県を代表する規模・内容を有しているといっても過言ではない。田切り地形が谷底との比高差を減少し微高地が形成されている標高705m付近は、清水田・水引とかいった字名が示すように各所で湧水がみられ、さら

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	時代				備考
			縄文	弥生	古墳	歴史	
1	西近津遺跡群	長土呂		○	○	○	一部調査(S46)
2	北近津遺跡群	長土呂		○	○		一部調査(S46)
3	周坊畑遺跡群	長土呂	○	○	○	○	一部調査(S54、55)
4	芝宮遺跡群	長土呂～小田井	○	○	○	○	一部調査(S54、55、57)
5	長土呂遺跡群	長土呂		○	○	○	
6	下蟹沢	長土呂		○	○	○	
7	新城	岩村田		○	○	○	
8	曾根新城	岩村田				○	
9	琵琶坂遺跡群	長土呂		○	○	○	
10	栗毛坂遺跡群	小田井～岩村田		○	○	○	
11	跡坂遺跡群	小田井～横根		○	○	○	
12	西赤座	岩村田		○	○	○	
13	上岩子	岩村田				○	
14	岩村田	岩村田		○	○	○	
15	潰石	上平尾		○	○	○	
16	腰巻	下平尾		○	○	○	
17	下小平	岩村田		○	○	○	一部調査(S55)
18	上小平	岩村田				○	
19	棧敷	安原				○	
20	西大久保	上平尾～下平尾	○	○	○	○	
21	蛇塚A遺跡群	安原				○	
22	下信濃石	岩村田				○	
23	蛇塚B遺跡群	新子田				○	一部調査(S54、58)
24	上の城遺跡群	岩村田	○	○	○	○	
25	円正防遺跡群	岩村田	○	○	○	○	一部調査(S48、54、58)
26	宮の後	岩村田		○	○	○	
27	一本柳遺跡群	岩村田		○	○	○	一部調査(S43、47)
28	宮の西	岩村田		○	○	○	一部調査(S58)
29	松の木	岩村田		○	○	○	
30	上砂田	岩村田		○	○	○	
31	北西久保	岩村田		○	○	○	一部調査(S44、45、54、57)
32	新町	岩村田		○	○	○	今回調査地

に、濁川流域を加えて広大な水田可耕地帯が展開する。もちろん、田切り地形の谷底も水量が安定している小河川があって充分水田が営める。いまだ古代の水田址は確認されていないが、この標高705m付近を中心として孤の長さ約3kmの範囲には、弥生時代中期後半～後期の集落が所狭しと密集していることから近い将来に水田址が検出される。

弥生時代中期の集落は、約15万㎡の面積を誇る西近津遺跡群全域に遺物が採集でき、たいへんな規模が予想される<sup>(2)</sup>、ほぼ同規模として周防畑遺跡群・長土呂遺跡群・岩村田遺跡群・琵琶坂遺跡群・一本柳遺跡群・上の城遺跡群があげられる。これらに比べて面積は少い北西久保遺跡<sup>(3)</sup>では、100棟を越える住居址群が検出されている。100棟は細分すれば3時期に渡っているものと思われるが、いづれにしても従来の佐久高原、冷涼、弥生時代小規模集落という見方を訂正するものに充分なものがある。後期に至っては、さらに、遺跡の数は増加しまさに佐久の大繁栄の感がある。特に本遺跡と同一台地上にあって、国道141号線で現在分断されている上直路遺跡<sup>(4)</sup>の銅釧の出土は、佐久地方の弥生時代解明にあたって、たいへん意義を持つものである。この他後期の集落が調査されているのは、周防畑B遺跡、下長敏遺跡、清水田遺跡、北一本柳遺跡、西八日町遺跡、北西久保遺跡などがある。

古墳時代前期・中期の遺構検出例は、この地域では北西久保遺跡の19棟の住居址だけである。市内の他地域では、新しい検出が相次いでおり今後増加するであろう。後期になると遺跡は数を増す。上の城遺跡15棟、東一本柳遺跡5棟、清水田遺跡3棟、北近津遺跡4棟、西近津遺跡3棟、西八日町遺跡49棟が発掘調査されている。この時期の遺跡は、弥生時代のあり方とほぼ一致している。古墳はすべて後期に属し、上塚原・下塚原や常田を中心とした群集墳が特に著名である。

奈良・平安時代の遺跡は、従来、奈良時代の土器が明確にし得なく両者を混同して扱ってきた。最近では、周防畑A・B、西八日町遺跡などで住居址が検出されている。

平安時代の代表的な遺跡は、上の城遺跡、西八日町遺跡、北一本柳遺跡、北西久保遺跡がある。

この奈良・平安時代の遺跡のあり方は、長土呂付近と上の城一帯に濃密に存在するという傾向がある。

このように、本遺跡周辺は佐久地方でもっとも弥生時代～平安時代の遺跡集中地帯であって本地方の原始・古代史解明にあたって実に豊富な資料を埋蔵しているといえる。

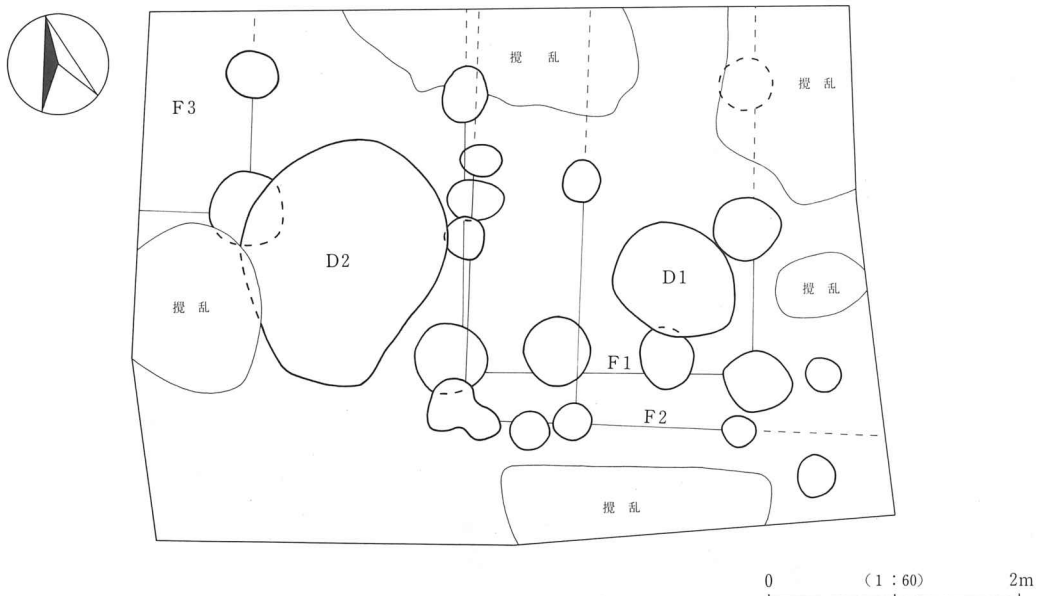
#### 註 文

- (1) 佐久市教育委員会 1984 『長野県佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
- (2) 昭和58・59年度に約5万㎡の範囲を中佐都農業協同組合による桃団地造成事業に先立ち、支柱の部分の調査を行った。1m四方の支柱用の掘り方を100箇所調査した結果、ほとんどすべてに遺構が確認された。
- (3) 昭和57年度に台地上の第1次、昭和60年度に第2次調査が行われた。200棟余の弥生時代～平安時代の堅穴住居址の他に埴輪が出土した周漣をはじめ17基の周漣・古墳が検出された。
- (4) 本遺跡に隣接し、昭和60年度に調査された長辺10mを測る大形の住居址内に設けられた長方形土壇より15点余の銅釧が人骨と共に出土した。

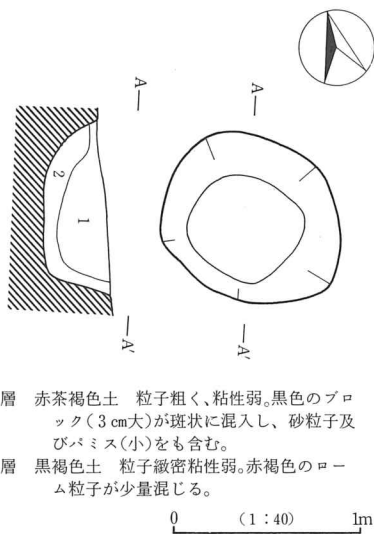


### Ⅲ 調査の成果

新町遺跡の県道拡幅部分（長さ110m、幅約5m）に、南側よりA～Eトレンチを設定し調査を行った。その結果、弥生時代の壺・甬・坏・高坏形の土器片、古墳時代の須恵器甕形土器片、中



第3図 新町遺跡Eトレンチ遺構全体図



- 1層 赤茶褐色土 粒子粗く、粘性弱。黒色のブロック（3cm大）が斑状に混入し、砂粒子及びバミス（小）をも含む。  
2層 黒褐色土 粒子緻密粘性弱。赤褐色のローム粒子が少量混じる。

第4図 D1号土坑実測図

世の美濃産鉄釉（徳利）、内耳土器、土師質土器（皿）、硯等が出土した。また、土坑2基、掘立柱建物址3棟が検出された。

#### 1 D1号地坑

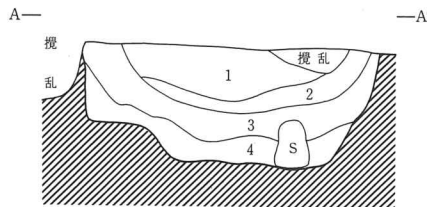
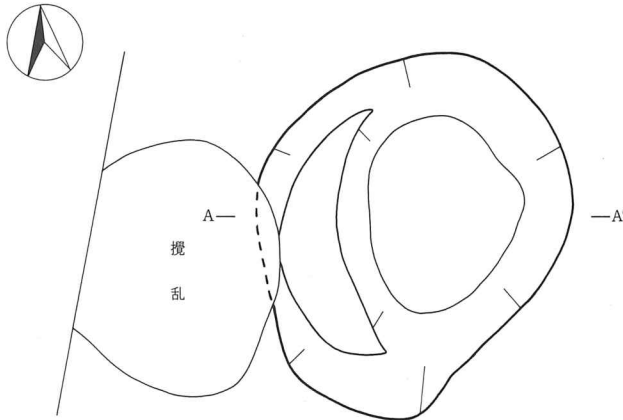
本土坑は調査区の北端Eトレンチの東側より検出された。東西100cm×南北90cmを測るほぼ円形を呈する。深さは、40cmを計測する。F1号掘立柱建物址と重複しており、F1号掘立柱建物址を一部破壊している。覆土は2層より成っている。

出土遺物はみられなく所産期・性格等不明係である。

## 2 D2号土坑

本土坑は、調査区北端Eトレンチ中央西測よりF2・3号掘立柱建物址の一部を破壊し、さらに西側一部上面を攪乱によって破壊されている。

平面形態は、198cm×160cmのやや不整な楕円形を呈し、西側には一段のテラスを有する。深さは確認画よりテラス部で42cm、最深部で62cmを測る。壁は比較的急傾所で立ち上がる。



- |    |      |                           |
|----|------|---------------------------|
| 1層 | 黒褐色土 | 粒子粗く粘性弱。バミス・ローム粒子多量に含む。   |
| 2層 | 黄褐色土 | 粒子粗く粘性弱。バミス・炭化物微量に含む。     |
| 3層 | 茶褐色土 | 黒色土粒子ブロック多量に含む。バミス含む。     |
| 4層 | 淡褐色土 | 粒子粗く粘性弱。ローム粒子・10cm大の礫を含む。 |

0 (1:40) 1m

第5図 D2号土坑実測図

覆土は4層に分割された。第1層はバミス・ローム粒子を含む黒褐色土層、第2層はバミス炭化物を含む黄褐色土層、第3層はバミスを含む茶褐色土層、第4層は淡褐色土層でローム址子を含み、砂質である。

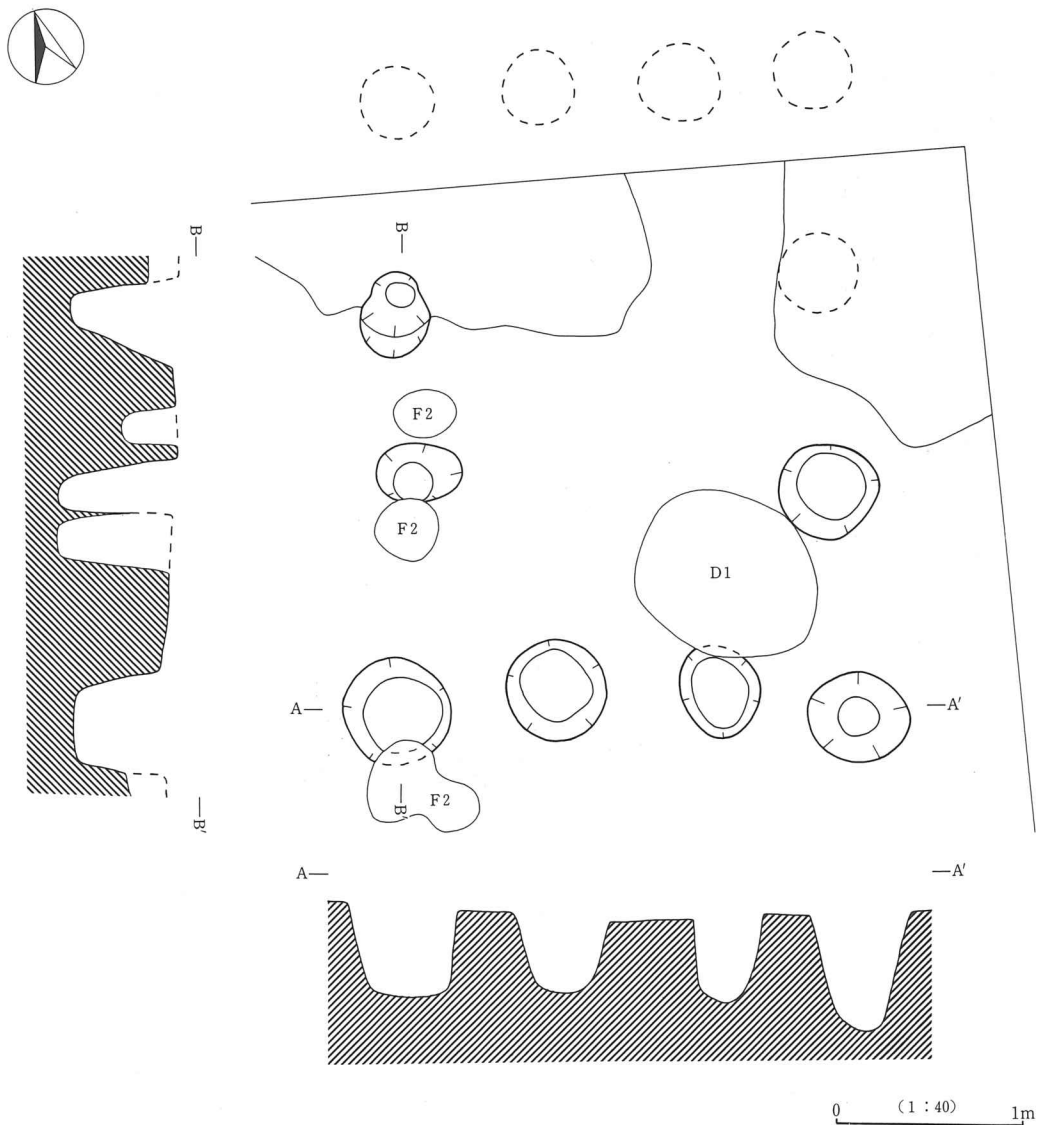
土坑内底面付近に径10cm大の礫がみられ、底面に接した状態で約20cmの礫が出土した。

出土遺物には、内耳土器があり本土坑の時期決定の良好な資料と思われる。さらに混入遺物として内外面に赤色塗彩の施された弥生時代後期の坏形土器が出土している。

本土坑の所産期は、15～16世紀と考えられよう。

## 3 F1号掘立柱建物址

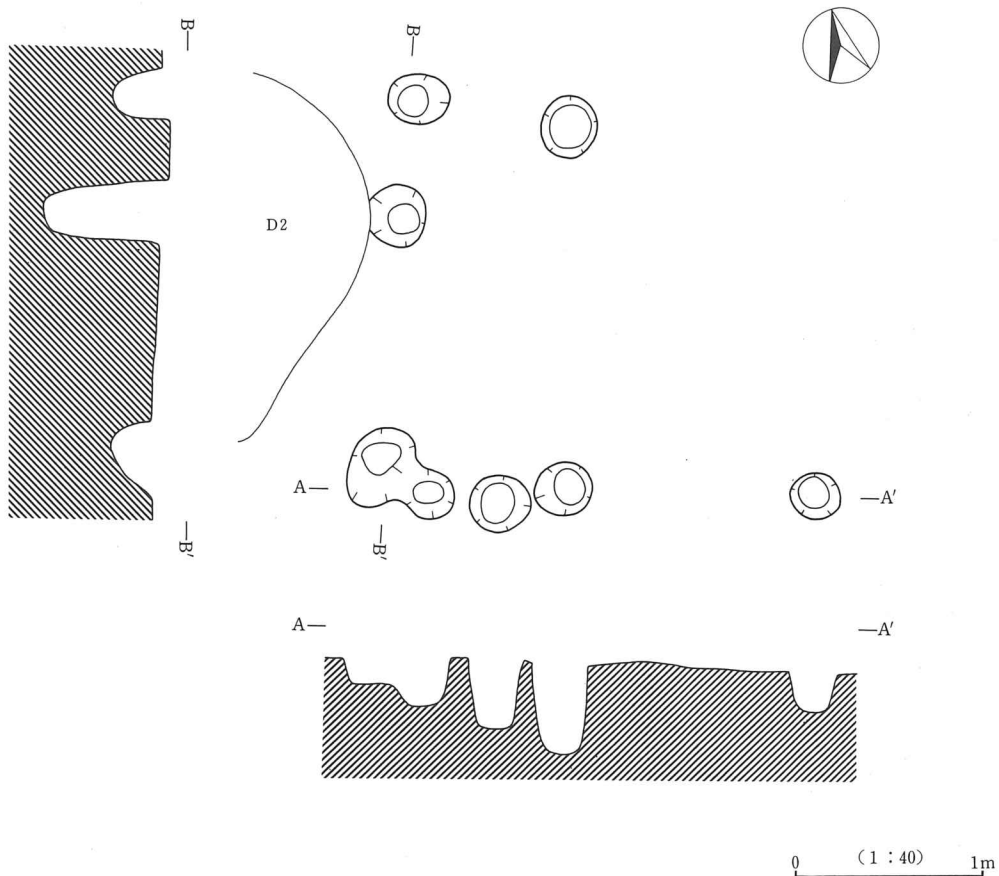
本建物址は、Eトレンチより検出された。F2号掘立柱建物址とD1号土坑と重複し、それぞれに一部を破壊されている。桁行三間以上、梁行三間(総長3m)の南北棟の建物である。建物の軸方向はN-17°-Eを示す。柱穴の掘り方は径50～60cmの円形を呈し、深さは40cm～65cmを測、50cm以上がほとんどである。柱痕は見い出せなかった。柱間の寸法は桁行120cm、梁行80cmを測る。



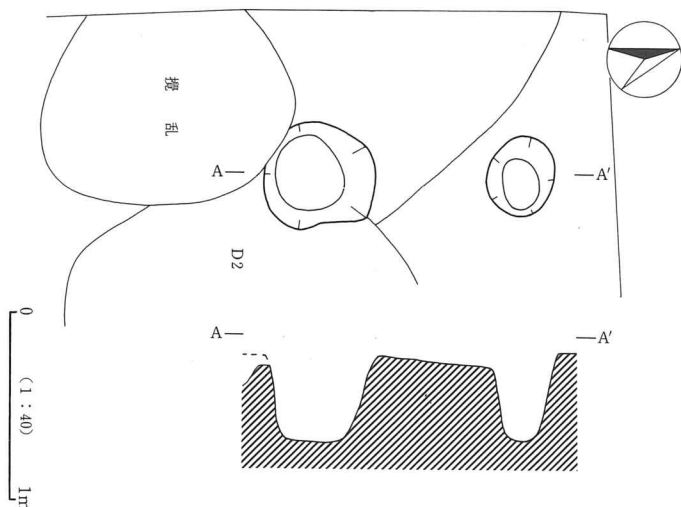
第6図 F1号掘立柱建物址実測図

#### 4 F2号掘立柱建物址

本建物址は、Eトレンチより検出された。F1号掘立柱建物址と重複し、一部を破壊している。桁行3間以上、梁行2間以上の南北棟の建物である。建物の軸方向はN-75°-Wを示している。西側に一間×二間(?)の空間をとっている。柱穴の掘り方は、径30cm~35cmの円形を呈し、深さは20cm~60cmを測る。柱間の寸法は桁行200cm、梁行100~140cmを測る。



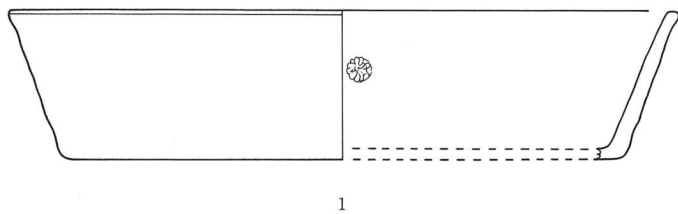
第7図 F2号掘立柱建物址実測図



第8図 F3号掘立柱建物址実測図

### 5 F3号掘立柱建物址

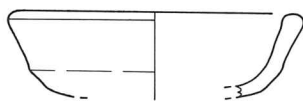
本建物址は調査区Eトレンチの西側より検出された。柱穴2個のみ検出にとどまったがさらに、北・西側の未調査区へ続くものと考えられる。南北軸はN-20°-Eをさしている。柱穴の掘り方は径40cm、60cmを測り、いづれも深さは50cmを計測する。



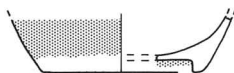
1



2



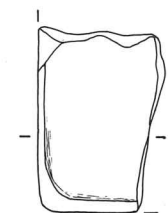
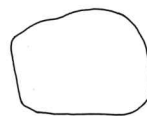
3



4



8



9

0 (1:4) 10cm

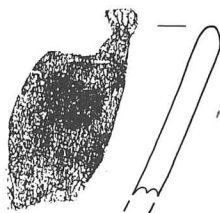
※ 1・2・3・4



5



6



7

0 (1:2) 5cm

※ 5・6・7・8

第9図 新町遺跡出土遺物実測図・拓影図

## 6 新町遺跡出土遺物

本遺跡のA～Eトレンチから、多くの遺物が出土した。特にEトレンチからは、多く出土した。その一部を第9図に図示した。

弥生時代は後期の壺・甕・坏・高坏形土器がC・D・Eトレンチから主に出土した。第9図の5はCトレンチ出土の甕形土器胴部片で後期特有の櫛描波状文が施されている。6はEトレンチ出土の壺形土器頸部片で櫛描によるT字文がみられる。7はEトレンチ内のD2号土坑より出土の甕形土器口辺部片で口唇部に櫛歯状工具による刻目が施されている。口辺部は無文である。

古墳時代は鬼高期の土師器胴部片と須恵器甕形土器片がDトレンチより出土した。

中世の遺物は、EトレンチD2号土坑から多く出土した。第9図1・2はD2号土坑出土の内耳土器である。1の口径は35・5cm、高さは8cmを測る。調整は外面底部付近ではヘラケズリしている。その上位には指ナデがうかがえる。内面は横ナデ。外面全体に灰が付着している器高が低い口縁部と体部が区別されない器形で、いわゆる「ほうろく」といえる。耳数は不明である。2は1と同一個体の可能性が強い。1・2とも砂粒を多く、雲母を少量含んでいる。3は土師質土器の皿形土器である。口径16cm、器高4.5cmを測る。胎土は砂粒・雲母を含む。肥厚する口唇部と口縁部に稜を有するなど一般的な器形とだいぶ異った特徴を有している。底部は丸底気味となっている。Cトレンチから出土した。4はEトレンチから出土した美濃産の鉄釉徳利である。外面の胴下部にわずか無施釉の部分がある。底部外面にも施釉工されている。

8は硬質砂岩の石製品で4面とも若干使用痕がみられる。9は輝緑凝灰岩製の硯である。8はEトレンチ、9はCトレンチから出土している。

他に図示しなかったが、Cトレンチから耳が認められる内耳土器、土師質土器の皿形土器も出土している。

以上、新町遺跡より検出・出土した遺構・遺物は、調査区が道路拡幅分ということからその明確な内容は把握できなかったが、弥生・古墳時代についてみればその出土遺物から調査区域外の近くに住居址等の存在が考えられる。

D2号土坑は中世に所産期が求められ、F1～F3号掘立柱建物址はD2号土坑より先行して構築されている。中世の内耳土器等を出土する土坑・竪穴遺構は、本遺跡より東方300mにある大井城より300基ほど検出されている。本遺跡で検出された遺構・遺物は、石並城・王城・黒岩城のいわゆる大井城に関連した人々や施設の存在を想起させるものであり、また、近隣の既調査遺跡の結果から新町遺跡から西友・岩村田郵便局へと弥生～平安時代の遺構の存在が判明した。



新町遺跡周辺航空写真



1. 新町遺跡出土トレンチ遺構全景



2. 新町遺跡D2号土坑

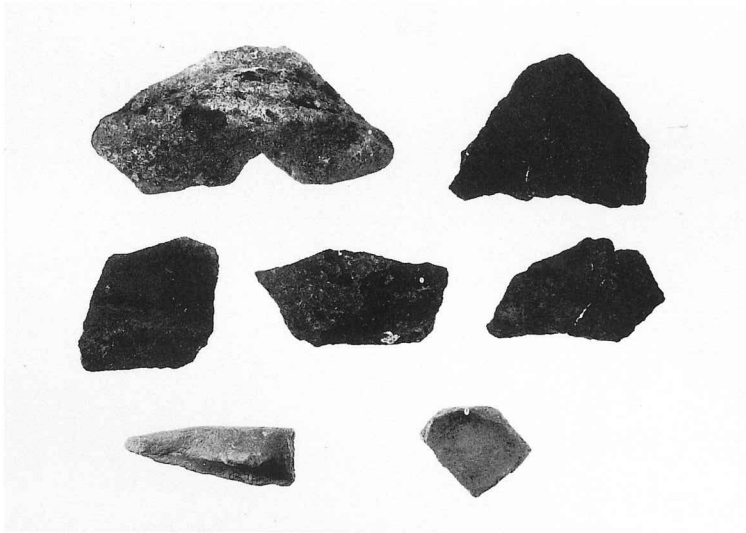




1. 新町遺跡D2号土坑出土の内耳土器



2. 新町遺跡D2号土坑出土の内耳土器



3. 新町遺跡出土の内耳土器・土師質土器



4. 新町遺跡出土の陶器

5. 新町遺跡出土の石器

新町遺跡(岩村田遺跡群)発掘調査報告書

昭和60年12月 発行

編集者 佐久市教育委員会  
発行者

印刷所 株式会社 佐久印刷所